

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2015年7月30日発行
 戦史館事務局〒029-4427
 岩手県奥州市衣川区陣場
 下4-1 蟹オフィス花岡
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩渕 宣輝 専務理事 大瀧 久治 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

“安全保障法案”と呼ばれる戦争法案11本が、スルスルと衆議院を通過した。国会審議がどんなにかみ合わなくても、どんどんボロが出てきても、ご主人様アメリカに約束したのだから「間に合わせなくちゃ」とA首相はがんばった。あの集団的自衛権の閣議決定から1年。近隣諸国との危機をあおるやり口にうんざりし、太刀打ちできないかも…と失望したり…。しかし今、衆院は通過したけれど、これからが勝負だ！何としても戦争法案阻止するぞ！と多くの戦史館会員は思っているだろう。戦没者たちの無念をかみしめて。

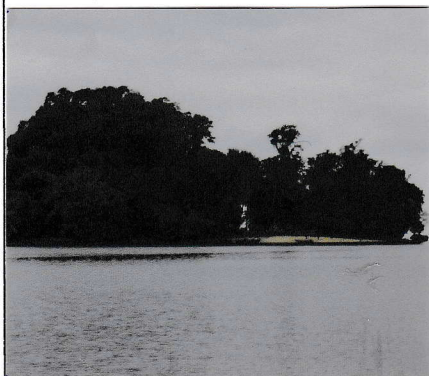
この1年ではっきりと“戦争のための法案”なのだと理解できた。A首相、教えてくれてありがとう。法案を11個まとめて複雑に見せれば反対は難しそうだし、戸締りするとか隣家の火事を消すとか、トンチンカンな事例を出せば時間稼ぎができるし、あとは小選挙区の強みで獲得した議席があるので簡単に衆院を通過する。景気良くして…と勘違いして投票した人は「騙された」と気づいた頃か。でも気づいて良かった。まだ引き返せる。

相変わらず舌足らずで「国民の命を守り戦争を未然に防ぎ…皆様の理解が得られるよう丁寧に説明…」としゃべりつづけたA首相だが、中身が何なのかは誰が見てもわかるし、「まったく正しいと思いますよ。私が総理なんですから」と国会で開き直る姿のほうが彼の本当の気持ちを正直に表現していたと思う。だけど思い通りになったんだから、もっと晴々とした顔すればいいのにねえ……。

これは妄想だけど…1年前、小学生のシンちゃんはおじいちゃんにほめられたいのに周りに理解されず、じだんだ踏んで悔しがった。1年後、幼稚園児に逆戻りしたシンちゃんが、おもちゃ売場でひっくり返って「だってボクほしいんだもん。センソウゴッコやりたいんだもん」とわめく動画が続き、次のシーンでは「ボク約束守ってイイ子にしてたよ。学芸会でもお上手に英語でお話したのにご褒美ないの？」と見回すと、今までシンちゃんをあやしてくれたシッターさんもお友だちも誰もいない。不安な顔のシンちゃんひとり。もちろん妄想なので、シンちゃんと日本国総理大臣とは、いっさい関係はありません。

でもね、今からでもやり直せることは沢山ある。安保法案の衆院通過後に内閣支持率が急降下したせいだろうか？？だが、素早く新国立競技場計画を見直したでしょ。あんなに強気で進めていたのに、ゼロからやり直すことができると示してくれたんだからA首相はエライ！沖縄普天間基地辺野古への移設問題もゼロから見直してもらおう。オリンピック招致で「福島原発はアンダーコントロール…」と言ったんだから約束を守ってもらおう。原発再稼働もストップだ。あのとき、東日本大震災後の復興した日本の姿をオリンピックで世界にお見せしたい…とか聞いた気もするが、A首相本人は他人が書いた原稿を読んだだけだから覚えてないかも。それならば70年前の原点に立ち返ってもらおう。シンちゃんもA首相も身内にA級戦犯はいても、身近な大切な人の中に戦没者がいなかったのかな？70年前で時間が止まったままのニューギニア戦場の今を知れば、戦争法案がよくわかる。直近6月、第1次派遣ヌサキ島の現場から、その一部をお伝えしたい。次の頁へつづく。

写真左：2014年3月、初めて調査に入ったスピオリ市ムサキ島。庇のような岩の半洞窟の堆積した土砂の下から日本兵の遺骸約50柱と海軍のホーロー食器類を発見。今年3月の再調査で、遺骸の半数近くが流出していたので、急きょ遺骸保存の協力を要請し、仮安置所の設置をお願いした。写真中央：仮安置所に収容できた日本兵の遺骸。写真右：6月の今年度第1次調査で、海岸近くを探索すると、林の中で、木の根が眼窩を突き抜けている頭蓋骨や、木の根に挟まった大腿骨約40体を発見した。



現在、7月26日から8月7日まで第2次派遣実施中で、長井勝さん、木村宏さん、岩渕会長の3名が現地で情報収集にあたっている。2次派遣ではビアク島、ムサキ島、アイブラボンディ島で（詳細は前号の古川さんの報告参照を）発見された遺骸が10月に帰還できるよう準備を進めている。ジャブラ方面プアイ村の搜索では、日本兵の遺骸かどうか判定できない遺骨が多数残された昨年の反省から、固体別の収容と管理方法が改善されてきた。ベラップ村での交渉も続き、ジャブラ方面の帰還は来年2月に予定されている。

帰り道は？ 正会員ナマの声 初めてのアンケートから…

戦史館活動は“帰り道”と発表したのは法人化10周年節目の2011年、大震災の年の総会だった。会員は半数、運営は赤字続き、もう70年も経ったからどこかで区切りをつけなければ…と多くの会員が考えていた。弱小高齢者集団なので、為政者に「つぶさなあかん」と危機感を持たれることもなく、近々店じまいか自然消滅かと誰もが…。

ところがこの1年間で世の中がにわかに怪しくなり（本当はきちんと戦後処理してこなかったツケが70年後に回ってきた）会員の意識も、何とかしないとまた戦争になるかも？と本気モードに変わってきた様子をアンケートが語っている。4月時点の正会員 199名に回答用紙を同封し、7月20日までに到着した76名の会員のナマの声をお伝えしたい。

「70年前、特攻隊員の一人として終戦を迎えた者です。再び戦争への懸念が増大している今、この活動は大きな警鐘になるものと信じ、かつ期待しております。」 「戦争の後始末を通じ、若者が再び戦場に駆り出されないよう、送り出さないよう遺骸の情報収集、遺骨帰還につなげましょう…と会報に書いてあるとおり、続けましょう。」 「戦史館だよりを読んで胸が痛みます。死者の人権を守ってほしい。戦没者のことを忘れないでほしい。戦後処理を通じて平和を守ってほしい。戦争はダメ、私も願っております。」 「国は遺骨収容に全面的に取り組む責任がある。集団的自衛権を論ずる前に、解決すべき課題だ。」

「戦後70年の年に、また戦場に近づく気配を感じます。海外で無念の死、慰霊はおろか、遺骸のまま野山に埋もれたままの遺族の方々の心中、どんなに悲痛か想像もつきません」

「戦史館の活動は国家的意義があるので協力したい。」 「今の政府の考え方や憲法改正論 靖国参拝に大変危機感を感じています。」 「辺野古基金に協力し、友人にも呼びかけました。戦争につながる新基地建設には断固反対です。」 「沖縄も海外の戦場も、まだ戦後になっていないと思う。」 「中公文庫書き下ろし『彷徨える英霊たち 戦争の怪異譚』7月25日刊行しました。」(生涯一記者を貫く田村洋三さん) 「今はまさに戦後最大の危機、この活動が消えてほしくない。」 「避戦の活動を継続する若者の育成を…」 「若い人たちが最近になって、集団で戦争反対!の声を上げ始めたことが救いに思えます。」 ⇨若い人たちが自身が真剣に考えて始めたSEALDsは、表現力が本当にスマート。(A首相ら一味のネット配信 感じ悪いヨネ)。少し前までは“戦史館を次の世代に継承できる形や方法にどうやって切り換えるか?”と活動の行く末を模索していましたが、高齢者予備軍や高齢者に若い人の真似は無理。戦史館会員は自らの体験、あの時代の記憶、幼かった日の気持ちを若い人、同世代、家族友人知人に、自分のことばで語り話題を作ることから声をあげて下さい。一人ひとりができる『避戦』の行動、たくさんあります。まだ間に合います。

正会員199名に同封したアンケートの中間報告。7月20日までに到着した76名の質問1～3の回答

3～40代 4名	5～60代会員 10名	70代の会員が回答者76名の過半数 42名 70代会員の平均年齢は、74.2歳	80代の会員は約2割 16名	90代 4名
-------------	----------------	--	-------------------	-----------

戦史館だよりは今までと同様に印刷物の郵送を希望する 54名	HPメール9名	送付不要10名	不明
-------------------------------	---------	---------	----

年代を問わず郵送希望が圧倒的。HPやFBも発信していますが、今後も郵送にします。送付不要と意思表示された方には、101号をもって発送終了します。長年会員として参加いただき、ありがとうございました。

戦史館の活動は有意義なので、何とか…できる限り…活動を継続したい 58名	体力的困難・退会12名	他4
--------------------------------------	-------------	----

返信いただいた会員の4分の3が継続を希望、たくさんのメッセージをいただきました。。一方、高齢や病気等で今年度をもって退会したいと意思表示をされた方々、長年お疲れ様でした。まだアンケートを返送されてない方、ありのままのお気持ちをお聞かせください。継続が困難な方は早目にお知らせください。

(複数回答あり) 活動資金を提供する方法で参加できる 50名	総会・行事参加 16名	現地派遣 10名	他
--------------------------------	-------------	----------	---

高齢で会員自身が動き回ることが困難でも、活動資金の提供という方法で参加いただくのは大変心強いです。

「入会5年目で帰り道は悔しいです。戦史館だよりは今では私の心の支え。柱を曲げず、思い残すことがないように、私も参加させてください。」

“戦史館だよりが心の支え”と書かれた文章にウツと息が止まり身動きできなかった。戦史館だよりを書き続け、経理に総会に、最近では委託事業、ほとんど疲れ果てた20年、まるで他人事のように「頑張っね」と言われるたび、これ以上どうやって頑張ればいいのか?と。会員減少で戦史館が自然消滅すれば、事務局のあれこれから、ようやく解放され救われるにちがいないと、活動の終了を事務局が一番強く願っていた。戦史館を続けてもやめても、世の中が変わるわけではない。しかし今ここで活動をやめることは、柱を曲げてしまうことだ。恨みがましい思いだけが残ってしまうだろう。アホノミクスとA首相一味を応援することと同じで、それでは自分が変わってしまう。ではこれからどう進める? その歩き方はアンケートからもまだ見えてこないが、一人一人にできる『避戦』行動があるのだから、もう一步…二歩と粘ってみよう。101号 102号へ…できる範囲で。(はな)